
欲しいモノ・邪魔なモノ

a-m

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

欲しいモノ・邪魔なモノ

【Nコード】

N3864Z

【作者名】

a - m

【あらすじ】

”結婚”によって愛する人の妻となったキラ。決して自分を愛してくれない夫、アシュレイ。アシュレイが望むのは侍女であるマルチナ。身分の違いにより想いを告げる事すら許されないアシュレイにキラは己自身を利用し駒にした。――異世界の恋愛もの。完璧なハッピーエンド主義の方は回れ右でお願いします。

1（前書き）

王道ではない？かもしれない異世界恋愛もの。

自分的には王道ではないと主張してみる

完璧なハッピーエンドではないです。（今のところ）

誤字脱字未修整です。それでもokな方、読んでみてくださいまし

「おかえりなさい、アシュレイ様」

ゴルネア大陸において、中立国として名をはせているバルータ国は、数少ない平和な国である。

しかし、他国に比べると昔からの伝統などを重視する傾向が強く、その中でも階級制度はバルータ国において意識しない者がいないほど根強く社会にはびこる風習であった。

今から半年前、その階級制度を利用し愛する人を形だけでも手にいれたある女性がいた。

それは、アシュレイ・シンプソン伯爵と半年前に結婚したキーラ・シンプソンである。

「ただいま、キーラ。今日は何をして過ごしたんだい？」

妻であるキーラに優しく微笑みかけるアシュレイ。

キーラも同じように美しい笑みを返す。

「今日は”マルチナ”と共に、町にお買い物に行きましたの。”マ

ルチナ”にとても似合う髪留めがあつて思わず買つてしまいました。もちろんアシュレイ様のお金で。」

いたずらっ子のような笑みをみせ、夫であるアシュレイに”マルチナ”という侍女の話をするキーラ。

アシュレイは先ほどと全く変わらない笑みを見せていたが、”マルチナ”の話になり、そして髪留めを買ったという話になると、誰にも気づかれないぐらいの微かな変化を見せた。

どこか嬉しそうな顔をし綺麗な笑みを見せたのだ。

二人を囲うように立っている執事や侍女達はその変化に気づくことはなかった。

だが、ずっとアシュレイを愛してきたキーラだけはその変化に気づいていた。

でもキーラは気づかないふりをする。

そして、愛するアシュレイに、アシュレイの愛する”マルチナ”の話をするのだ。

アシュレイが本当に知りたいのはキーラがどう過ごしたか、ではなく、マルチナがどう過ごしたか、であるとキーラは知っていたから。。

バルータ国には王を支える5人の大臣が存在する。

国において王の次に権力を持つのが宰相であるニコラス・ヌバル。

そしてその宰相に続き権力を持つのが、選ばれた5人の大臣である。

5人の中の1人に選ばれるためには、実力、そして実績だけではなく身分も重視される。

代々続く有名貴族であるシンプソン家は、宰相の娘であるキーラ・ヌバルと結婚し、その身分を確実なものとして、最年少の28歳で大臣に昇格した。

そしてその昇格と共に盛大な結婚披露宴をおこなったキーラ達は世間からも認められた夫婦であった。

だが、それは形だけ……。

キーラは幼い頃にアシュレイと舞踏会で会ってから、ずっと彼に憧れに近い恋心を抱いていた。

年に数回、夜会や舞踏会などでしか会う事が叶わなかったアシュレイに抱く感情はただの初恋の延長だと自分自身に言い聞かせ続けていたキーラであったが、それが何年も続いた頃には、自分の感情を認め、自分の想いが実る事がない事に気づきながらも、年に数回一

時の間だけ会うアシュレイに想いをよせていた。

ずっと好きだったアシュレイ。

好きだと告げる事も叶わない恋心。

なぜならずっとアシュレイを見ていたキーラは気づいてしまったから。

自分がアシュレイを思うのと同じように、アシュレイにも心をよせている人がいることに。

「それで、マルチナはその髪留め喜んでいた？」

同じベッドで横になりながらも、アシュレイが聞くのはマルチナのこと。

「はい。とても喜んでいました。明日の朝はそれで髪を留めるように言っておきましたから、朝食の時にでもほめてあげてくださいね。そうすれば私のセンスが良いことを彼女も信じるでしょうから。」

曇りのない笑みをアシュレイに見せながらキーラはアシュレイの為にだけに言葉を告げる。

本当は他の女性の事などをほめてほしいはずがない。

だが、キーラがそれを勧めればアシュレイは苦しむことなく素直な気持ちをマルチナに告げる事ができる。

「そうだね、マルチナは謙虚だからきつと髪留めを受け取る事を決ったんだろうね。」

白いベッドを彩るように流れる美しい金に輝くキーラの髪をアシュレイはなでながら、マルチナの事を思う。

1 (後書き)

短編で一回あげたのを、長かったのでちょいとわけました

幼い頃にシンプソン家にやってきた孤児のマルチナ。

同じ歳のマルチナとアシュレイは兄弟のように共に育ったが、成人である15を迎えた年にマルチナは侍女になった。

アシュレイはずっとマルチナを思ってきたが、その想いは決して叶わない事を知っていた。

そして、それが決定的となったのがマルチナが侍女になった時である。

父の後を次伯爵を名乗る自分と、孤児であり侍女という身分のマルチナとは決して付き合う事も、結婚する事も出来ない。

それでも諦める事ができず、他の女性を思うことも出来なかったアシュレイは仕事にのみ打ち込んだ。

そして宰相より告げられた、キーラとの縁談。

それを受ければ大臣への昇格が認められることも共に告げられた。

アシュレイは大臣への昇格の話よりもキーラとの縁談話により一層驚きを示した。

宰相の娘ということもあって、毎年数回だけではあるが舞踏会などで会うキーラの顔は覚えていた。

だが、アシュレイにとってキーラは8歳年下だということもあって、ただの可愛いお嬢様という印象しか抱いていなかった。

「ですが、キーラ様は私よりも8歳も年下です。私よりも歳の近い良い青年がいるのでは・・・。」

アシュレイは良い話ではあるが、成人し美しい女性になったキーラを思い浮かべても、どうしても自分には若すぎると考え、断るつもりで口を開いた。

だが、宰相でありキーラの父でもあるニコラスは優しく微笑みながらも強い口調でアシュレイの言葉を遮った。

「いや、アシュレイ、君しかいないんだよ。娘の夫になる人物はね。君にすでに心に決めた女性がいないのであれば、娘と結婚してみないかい。なに、今すぐにあの子を女として見ろとは言わないよ。だが、親の私がいうのもただけだね、あの子は本当に母親似の美しい子に育ったんだよ。結婚して一緒にすごせば、きっと君もその気になるさ。」

啞然とするアシュレイに、ニコラスは追い打ちをかけるかのように言葉を続けた。

「まあ、君がどうしても娘以外の女性と結婚したいのなら諦めるが、その予定がないのなら私の話を受けなさい。あ、それとこの話はすでにキーラは承知しているよ。」

キーラも承知しているという言葉にアシュレイは戸惑った。

「ですが・・私はキーラ様と年に数回しかお話をしたことがございません。それはキーラ様も同じこと・・。キーラ様は宰相殿の願いをただ聞き入れただけでは？」

聞くものによつては不敬にもとられる言葉であつたが、アシュレイは迷いながらもはつきりと口にした。

そんなアシュレイにニコラスは豪快に笑つてみせた。

「君は全くキーラの事をわかっていないね！まあ、それも当然ではあるが、キーラは君の事をよく分かつているようだよ？まあ、君がこの話を断るうとも私は気にしないよ。ただ、覚えておくんだねキーラと結婚する事で君がずっと手にいれたかったモノが手に入るよ。」

どこか挑発するかのように言葉を締めくくつたニコラス。

アシュレイは眉をよせ、ニコラスの言葉に思わず反論した。

「・・それはありえません。私が心から求めるモノは決してキーラ様との結婚では手に入りません。」

迷うことなく言いきつたアシュレイ。

だが、ニコラスは馬鹿にするかのような笑みを見せると、ため息をつきながらアシュレイに言つた。

「本当に君はキーラの言つた通りの人物だね。まあ、君は信じないかもしれないけれど、私はこれでも娘を溺愛しているからね、一つ

教えておこつ。」

言葉をくぎり、急に真剣な顔をうかべ、アシュレイを見たニコラスにアシュレイも気を引き締めた。

「娘はね、君を愛しているんだよ。それは・・もう、心からね。初めて君と出会った8歳の頃から、もう11年もの間、君だけを一途に愛しているよ。だから、娘は君を幸せにする事だけを考えて、君との縁談を了承した。まあ、私が娘の想いに気づいたのは、その縁談話を娘に告げた時なんだけれどね。あの子は決して泣かない子なんだよ。そんなあの子が泣き崩れちゃってねえ。その時間いつめたんだよね。あの子が隠し続けた想いを。まあ、そういうことだからいつまでもそんな馬鹿顔晒してないで、明日には答えを聞かせておくれよ。」

言いたい事を言いきったニコラスは言葉をなくし呆然とするアシュレイを残し、さっそうと愛する妻と娘がいる自邸へと向かうのであった。

それから、アシュレイは自分がいくら思っても決して叶う事のない愛をマルチナに抱き続けるよりも、自分を11年もの間思っていてくれたキーラと結婚する事を決意した。

ただ、アシュレイは一つの事を忘れていた。

キーラと結婚する事で己が最も求めているモノが手に入ると言ったニコラスの言葉を・・・。

「ええ、最初はいくら言っても受け取らなかったんですよ。でも、最後に私が”受け取らなかったら明日家出するから”って脅したら困ったように笑いながらようやく受け取ったんです。」

笑いながら言うキーラの言葉に驚いたアシュレイは自分の横で寝ているキーラをのぞきこむように見た。

「もちろん・・・それは冗談で言ったんだよね？」

どこか焦るかのように、自分を見下ろすアシュレイにキーラは苦笑をもらった。

「もちろん冗談ですよ。そんな事でアシュレイ様の家から出て行きませんか。もし・・・家出するなら別の理由でします。」

アシュレイから視線をそらすことなく、そして微かな笑みを浮かべながら言ったキーラにアシュレイは眉をしかめた。

「僕の家って・・・もう君は僕の妻なんだから、君の家でもあるだろう？それに別の理由ってなにか家出するような理由あるの？」

「アシュレイ様は・・・これ以上ないぐらい私によくしてくださいます。」

答えになっていないキーラの言葉にアシュレイはどこか怒ったような雰囲気でキーラの頬をなでた。

「・・・よくはしてもらっているけれど、何か不満があるとか？」

キーラはアシュレイをなだめるかのように、そっと抱き寄せる。

己の体重をかけないように気をつけながらキーラの上から抱きしめ返すアシュレイ。

キーラの耳の辺りに顔を埋めたアシュレイは、この時キーラの表情が見えなかった。

「・・・なにも不満などありません。愛しています。アシュレイ様。私はとても幸せです。・・・アシュレイ様のことも、きっと幸せにしてみせます。」

キーラの美しい青い瞳にたまった涙にアシュレイは気づかなかった。アシュレイも自分がキーラから愛されていると言われたことに安心と喜びを抱いたことには気づかず、そのままお互いに抱きしめ合っていた。

何事もなく、いつもと同じ毎日が半年過ぎ、結婚して1年を迎える頃。

大臣としての執務をこなしていたアシュレイに一通の手紙が届いた。それは、キーラの父であり、この国の宰相であるニコラスからの手紙であった。

一言、宰相の執務室に来るように告げられた手紙を見て、アシュレイはどこか不安を抱きながらも、すぐにニコラスのもとへと向かう。

銀で装飾がなされている宰相室の扉の前で、アシュレイは一度心を落ち着かせると、入室の許可をもらう為に声を出した。

すぐに中から返された声にアシュレイは静かに扉をひらき、中にあ
る大きなソファアーに座るニコラスのもとへ足を進めた。

「お手紙をいただき、すぐに参りました。」

ニコラスによって勧められ、むかいのソファアーに腰をおろしたアシ
ユレイはすぐに用件を問う。

だが、ニコラスは何も答えずどこか睨むかのようにアシュレイを見
ていた。

「・・・何かございましたか？」

いつにない様子のニコラスにアシュレイは困惑しながらも、問いか
ける。

「・・・何かあったかだと？キーラのことに関心している。君は結婚
して1年経ってもまだキーラを思うことはできないのか？」

ニコラスが初めてアシュレイに対して怒りを露にした。

アシュレイは言われた事の意味を瞬時にさとると、眉間に皺をよせ、

ニコラスを見た。

「私は私なりにキーラを大切にしているつもりですが。」

「ほう。大切にしているねえ……。都合の良い言葉だな。」

益々辛辣な口調になるニコラスにアシュレイは思わずため息をもらした。

「・・・申し訳ございませんが、キーラはすでに私の妻です。こういつたことは、私とキーラの問題です。」

ニコラスはそんなアシュレイに嘲笑をうかべると、強い怒りをもって言葉を投げつけた。

「私は最初に君に縁談を持ちかけた時に言ったね、”キーラと結婚する事で君がずっと手にいれたかったモノが手に入る”と。それは、キーラが君を本当に愛しているからだ。私は君が手にいれたいと思うモノがキーラと結婚する事で変わるだろうと考えた。だが、1年経った今でも君が手にいれたいモノはマルチナとかいう幼馴染の侍女であって、君を心から愛する私の娘ではないようだ。まあ、私が勝手に抱いた希望だ。君が心を変えなかったからといって責められることではない。だが、もうすぐ君は求めている”モノ”を得て幸せを掴むだろう。私の娘だけを不幸にしてね……。私は心から娘を愛している。このぐらいの文句を言っただって許されるであろう?」

アシュレイが途中で言葉を放つことを許さず、一気に言い終えたニコラス。

表情にはアシュレイへの憎しみを微かに浮かべながらも、隠す事が

出来ないほどの悲しみも浮かべていた。

アシュレイはニコラスの言葉を聞きながら、自分の心が悪い予感でただよい、心音が早まるのも感じた。

そして、全て聞き終わった時、自分があり得ない程動揺している事に気づく。

震える指に力を入れ、ニコラスを見た。

「キーラは・・・私がマルチナを好いていることを知っていたのですか・・・」

アシュレイは現実が変わらない事に気づきながらも、ニコラスに否定して欲しかった。

自分が今迄キーラにしてきたことが、どれほどキーラを傷つけていたか、想像したくもなかった。

「結婚する前から知っていたよ。それでもキーラは君と結婚する事を望んだ。だから、君がキーラの前で何度マルチナへの想いを露にしようとも私は君を責めることはできない。キーラはそれを覚悟して結婚したんだからね。」

すでにアシュレイに対する憎しみを瞳から消し去っていたニコラスであったが、どこか拗ねたような態度でニコラスに荒々しく言葉を投げ返す。

「・・・つつ・・・そんなっ・・・!・・・では、まさかもうすぐ手に

入るモノとはマルチナの事ですか?！」

絶望のあまり頭をかかえ項垂れたアシュレイであったが、すぐに何か気づくと、慌てて顔をあげ、真直ぐとニコラスを見た。

「それ以外に君が手にいれたいモノなどないだろう? 君は娘と結婚する事では決して手に入る事ができないと言ったが、君にそれを与える為に、娘は君と結婚したんだと言ったら・・・君はどうする?」

真剣な顔で、何の感情も現すことなく静かにアシュレイに問いかけるニコラス。

アシュレイは、そんなニコラスの言葉でキーラの考えに気づき、思わず両手で顔を覆った。

言葉をなくし、震える手で己の顔を覆い隠したアシュレイにニコラスは最後に強い口調ではあったが、優しく言葉を投げかけた。

「もし君が罪悪感から娘と離縁する事を拒むことがあれば、私は君を絶対に許さない。だが・・・もし君が心から娘を・・・キーラを受け入れようとするのであれば、最後に1つだけ教えよう。」

そんなニコラスの言葉にアシュレイはゆっくりと顔をあげ、苦しげに歪む顔を隠すことなくニコラスを見やった。

「私が君の屋敷に行き、マルチナにキーラの義姉になるよう話をしに行くのは明日の午前だ。マルチナはまだこの話を知らない。まあ・・・それにマルチナが了承するかもわからないが。とにかく、キーラの願い通り私は明日の午前に君の屋敷に行く。いいな? 明日だぞ。」

段々と瞳に力を戻したアシュレイにニコラスは苦笑をもらしながら、静かにアシュレイに退出するよう示したのであった。

ゆっくりと静かに閉められた扉。

静かになった執務室で、ニコラスはソファーに体をゆだね、体から力を抜くと、大きなため息と共に天井を見やった。

「・・・まったく、これで鈍感な二人が上手くいけばいいけどねえ・
。」

ニコラスの執務室から退室したアシュレイはといえば、自分の執務室には戻らず、そのまま城をあとにした。

馬車にゆられながら、自分の家へと戻る途中、アシュレイはこれまでのキーラとの結婚生活を思い返していた。

帰宅後、今日の出来事を問いかける度に、自然とマルチナの事を話出したキーラ

自分がどんなにマルチナの話をしようとも、嫌な顔一つせずいつも笑って話してくれたキーラ

思い出すのキーラの顔は全て美しい笑みだった

その笑顔の陰で、キーラがどれほど悲しんでいたのか・・・

アシュレイはガタゴトと揺れる馬車の音を聞きながら、思考を廻らす

そして、ある事に気づくのだ

「・・・僕はキーラの笑顔しか知らない」

それは普通ならば喜ばしいこと

しかしアシュレイはキーラの心内を思うと、悲しくて悔しくて自分が情けなくて仕方ないのであった

馬車の音、そして馬の？が表門から屋敷の玄関口に轟いた

アシュレイの乗る馬車がいつも通り玄関口へと続く道を進む

薔薇のトンネルを抜ける際には馬車の中にまで薔薇の香りが風にのってやってくる

色とりどりの薔薇が所狭しと咲き誇る庭をぬけると、赤茶の煉瓦によって作られた屋敷の玄関口が見えてくる

そこにはすでに、キーラやマルチナ、そして数人の執事がアシュレイを待っていた。

馬車から降りたアシュレイは、すぐにキーラに視線をむけるがその隣にマルチナが立っているのに気づく。

微かに目を見開きマルチナを見たアシュレイにキーラはすぐに気づいていた

――頑張って笑わなくちゃ・・

マルチナを見やるアシュレイにキーラは一瞬顔が強ばるのを感じ、慌てて気を取り直し満面の笑みを顔に貼付けた

「アシュレイ様ったら、久しぶりにマルチナと会ったからってそんな変な顔をして固まっていなくてください。」

くすくす、と笑いながらマルチナを見たままのアシュレイに言葉をかける

「――もう少し待って下さい。あと少しですから。」

アシュレイはハッと我にかえったかのように、マルチナから視線を外すとキーラを見たが、その顔はとても苦しげであった。

だが、そんなアシュレイの表情には気づいたのはキーラだけであり、他の侍女や執事、そしてマルチナも気づかなかった。

そのため、キーラの言葉を受け継ぐように、マルチナもからからと笑いながら、アシュレイをからかうように言葉を連ねたのだ。

「旦那様？ そんなに私に会いたければもっと早く帰ってきて下さいね。いつも私が家に帰ってから旦那様のご帰宅なさるからお会いできないんですよ？」

アシュレイに特別な感情を持っていないマルチナ

そしてアシュレイが自分に想いをよせていることを知らないからこそ言えた冗談であった。

だが、アシュレイの気持ちを知っているキーラからしてみれば、思わず俯いてしまうには十分の言葉だった。

一瞬下を向いたキーラであったが、すぐにいつも通りの笑みを浮かべ顔をあげた。

だが、アシュレイはずっとキーラを見ていたため、気づいたのだ。

キーラの笑みがどこか強ばっていることに。

――今迄もこのような笑みを浮かべていたのだろうか・

思い返してみても、キーラの笑みはいつも美しかった

だが、それはどんな時でもそのようにキーラが努めていたのだと、アシュレイは初めて気づく事が出来たのであった。

キーラの言葉にも、マルチナの言葉にも何も言葉を返さず、ずっとどこか思い詰めたような表情でキーラを見やるアシュレイに皆、戸惑いの表情を浮かべた。

「アシュレイ様？　どうかいたしましたか？　どこかお体でも悪いのですか？」

心配そうにアシュレイをうかがうキーラ。

華奢な白い手をそつとアシュレイに伸ばし、額に手をあて熱を見る。無言でキーラを見つめたままにいるアシュレイにキーラは困ったように微笑んだ。

「お熱はないようですが……。本当にどうしましたか？」

そつと手を額から離し、アシュレイに問うキーラであつたが、内心とても戸惑っていた。

――どうしてそんな苦しげな瞳をしているの？

アシュレイはそつとキーラから視線を外し

「少し話があるんだ。」とだけキーラに告げると心配そうにしているマルチナや執事たちには何も告げず屋敷に入り自室へと向かった。

キーラはアシュレイの後ろ姿をじつと見つめていたが、マルチナ達の氣遣うような視線に気づき、すぐに笑みをうかべ

「ではアシュレイ様のご希望通りたくさーんお話してくるわね」と少しふざけたように元気にマルチナ達に告げ、アシュレイの部屋へと向かった。

キーラの元氣そうな様子にマルチナ達も安堵したように微笑み合うと、お互いに自分の仕事へと戻るのであった。

「アシュレイ様？入ってもよろしいですか？」

戸惑うような声音でかけられたキーラの声に、イスに座り天井を眺めていたアシュレイは一度深呼吸をすると、立ち上がってキーラを迎え入れた。

「変な態度をとってごめん。色々考えることがあって、ついね・・」

アシュレイは朗らかな笑みを見せながら、キーラの腰に手をまわしエスコートしながら、長椅子にキーラを座らせた。

いつもと違うアシュレイの様子にキーラは戸惑うようにアシュレイを見つめる。

「いえ、いいのです。ですが・・お話とはなんですか？」

すぐに本題に入ろうとするキーラ。

アシュレイはキーラの隣に腰掛け、無言でキーラと視線を合わせた。

「・・キーラは僕を愛していると何度も言ってくれたね。でも、僕が君に”愛している”と告げたことはなかった。」

アシュレイが話し始めた言葉にキーラは目を見開いた。

「そ・・それは、私が勝手に言っていただけですから・・アシュレイ様が仰らなければならぬ理由はありませんわ。」

動揺する自分を隠すように、そつとアシュレイから視線をそらしたキーラ。

アシュレイはそんなキーラの頬にそつと手を伸ばし、キーラの視線を自分へと戻した。

いつにないアシュレイの少し強引な行動にキーラは緊張感を覚えずにはいらなかった。

だが、そんな感情も隠すかのように、自分の頬にふれるアシュレイの手にそつと自分の手をのせ、綺麗に微笑んでみせた。

「アシュレイ様？本当に今日は変ですね。」

そんな軽口を言いながらも、自分の頬からアシュレイの手をはずしたキーラ。

そして、アシュレイの手から自分の手を引っ込めようとした時、アシュレイが素早い動作でキーラの手を掴んだ。

「・・・どうして君はいつも笑っているんだ。」

アシュレイが顔を苦しそうに歪めながら告げた言葉にキーラは驚きを露にした。

キーラの手を強く掴んだままアシュレイは言葉を続ける。

「今日・・・ニコラス殿からある話を聞いた・・・君がマルチナを又バル家の養子として迎えようとしていることを。」

アシュレイが掴んだキーラの手からキーラの動揺がアシュレイに伝わった。

「・・・っ、それは、私がマルチナを姉のように慕っているからというだけです。」

慌てたように言葉を紡ぎながらも、アシュレイから逃れようと手を引っ込めようとするキーラ。

だが、アシュレイはそれを許さず益々強くキーラの手を掴むと、自分の方へと引き寄せた。

「きゃっあ」

強引にアシュレイに引っ張られたキーラは、微かな悲鳴をあげて、アシュレイの胸元へと倒れ込んだ。

瞬時にアシュレイに抱き込まれてしまったキーラは、動揺し暴れるように離れようとするがアシュレイは決して許さなかった。

「・・・アシュレイ様！どうなさったのですかっ お離してください！」

自分から必死に離れようとするキーラにアシュレイは囁くように言葉告げる。

「キーラ・・・今迄すまなかった。君が僕のことを愛してくれているのは知っていたのに、僕は君に同じだけの愛を返せなかった。」

そんなアシュレイの言葉にびくりと肩を震わせたキーラは暴れるのをやめ、無言になった。

「・・・今日、ニコラス殿から全て聞いたんだよ。ねえ、キーラ。君

がマルチナを義姉としてヌバル家に迎えるのは僕の為だろう？マルチナがヌバル家に養子として迎えられたら伯爵である僕と結婚が出来る。そうしたら、君は・・・僕と離縁する気なんだろう？君は最初からそのつもりで僕と結婚したんだ。そうなんだろう？」

キーラはアシュレイの言葉を聞きながら自分がどうすれば、いいのかわからなくなっていた。

「・・・笑わなくちゃ・・・つつ笑って否定しなくちゃ・・・何を馬鹿な事をいつているのですかって・・・言わなくちゃッッ・・・！」

キーラの瞳から溢れ出てくる涙は、どんな言葉を連ねようともアシュレイを信じさせることは出来ないのだが、キーラはそれに気づいていなかった。

アシュレイの胸元をぬらす涙。

アシュレイはキーラが泣いていることに気づき、そつとキーラを自分の腕から逃がした。

キーラは弱まったアシュレイの腕に、われに変えると、動揺する自分を隠すかのように笑ってみせた。

だが、その瞳からは涙をながし、キーラの笑みを台無しにしていた。

それでもキーラは気丈に微笑む。

「アシュレイ様ってば・・・どうし・・・たんですか？何で私が・・・マルチナを義姉にしたら、アシュレイ様と・・・離縁しな・・・くてはならないのですか？」

泣き声がまざり、とぎれとぎれになる言葉。

キーラはそれでも自分が泣いていることには気づかずに涙を頬に流しながら笑ってアシュレイを見ていた。

アシュレイは言葉なく・・・静かにキーラを見つめる。

「へんな・・・つつ・・・アシュレイ様」

涙を流しながらアシュレイをからかうように笑うキーラ。

そして、下を向いたキーラは、その瞬間に自分の手に涙が滴ったことで、ようやく自分が泣いていることに気づき慌てて頬をぬぐう。

そんなキーラの様子を黙ってみていたアシュレイは苦々しげに顔を歪めキーラの顎を掴み上をむかせた。

そして、片方の手でキーラの涙をそつと包むようにぬぐう。

「ごめん・・・ごめん、キーラ。でも、信じてほしい。僕は君と離縁したいなんて考えていない。僕の妻は君だ。マルチナと・・・たとえば結婚できるとしても結婚することはない。」

真剣な瞳でキーラに言うアシュレイ。

だが、キーラはそんなアシュレイの様子からあることに気づいた。

その瞬間、流れていた涙がとまる。

静かに何も言わずにアシュレイをみるキーラ。

アシュレイは戸惑うかのように、キーラに問いかける。

「どうしたんだい？僕の言葉を信じてくれた？」

「――結婚することはない・・・したくない」と言わないところが、嘘をつけないアシュレイ様らしいわ・・・私に同情してくださっているのね・・・」

「アシュレイ様が私に情けをかけてくださるのは、少しでも私を思ってくださっているから・・・それは嬉しいです。でも、それで離縁しないとと言われても嬉しくはありません。」

どこか諦めたように苦笑をもらしながら、アシュレイを見たキーラ。

アシュレイはキーラに言われた言葉の意味を理解し、悲しげな表情を浮かべた。

「私は今も幸せです・・・でも私って結構欲張りなんです。もっともっと幸せになりたい。その為にアシュレイ様には今まで抱けなかった希望を贈りたいのです。マルチナがアシュレイ様と結婚できる身分になった時、アシュレイ様がご自身の心に従って素直に行動で

きるようになっていて欲しいのです。」

「なにを言っているんだ……。僕には君がいる。マルチナと結婚はしないよ。それにマルチナは僕の何を何とも思っていない。」

縋り付くかのようにキーラに言葉を返すアシュレイ。

「例えマルチナの気持ちがどうであれ、身分のことを考えずにマルチナに愛を告げることはできません。例え上手くいかなくても、今迄隠してきた想いを愛する人に告げることができなのです。愛する人に自分の想いを伝えることは……。とっても幸せなことだから。」

美しく微笑むキーラ。

言葉をなくし、瞳に苦しみを宿しているアシュレイを、キーラはそっと抱きしめた。

キーラの華奢な体で抱きしめられたアシュレイは、そっと瞳を閉じ、唇をかみしめてキーラを抱きしめ返した。

「アシュレイ様・・使い道がなくなったモノはただの邪魔モノになるんです。私がアシュレイ様の為に出来る事は、マルチナに身分を与え、アシュレイ様がマルチナに堂々と愛を告げることができるようになることだけ。あとはアシュレイ様とマルチナの物語です。私は登場人物に含まれません。」

そんなキーラの言葉にアシュレイは瞬時に反論しようとした。

だが、キーラはそれを許さず、アシュレイを抱きしめたまま言葉を続ける。

「ごめんなさい。アシュレイ様には気づかれることなく事を進める予定でしたのに、お父様が話してしまわれたせいで、アシュレイ様を苦しめる事になってしまいました。明日、マルチナを又バル家の養子として迎えることができるようマルチナを説得します。アシュレイ様は何も知らないふりでいて下さい。離縁の際も私が上手くやります。アシュレイ様にご迷惑はおかけいたしません。」

アシュレイは強引にキーラを離すと、キーラの目をみて、怒鳴るように言葉を放った。

「やめてくれ・・・っ！僕はそんな事を望んではないんだ。マルチナのことはもういい・・・っ！キーラさえいてくれればそれでいいんだ！」

必死に告げるアシュレイ。

その言葉に嘘はなかったが、決して本心でなかったこともキーラは悟っていた。

「私はアシュレイ様が大好きです。それと同じぐらいアシュレイ様がマルチナのことを思っていることを知っています。」

静かに微笑むキーラ。

「私が消え、マルチナが私の義姉となることで、アシュレイ様はご

自分の心に嘘をつくことなく生きて行ける。誰にとってもこれが一番良い方法なんです。」

キーラを説得する言葉をアシュレイは持っていなかった。

なぜなら、キーラの言う通り、アシュレイはマルチナの事を未だに愛しているから。

いや・・・そうアシュレイ自身も思っていたから。

そして、その後何も言葉を交わすことなく、夕食を終え、そしていつも通り同じベッドで眠りについた。

まるで何事もなかったかのように振る舞う。

そして翌日、予定通りニコラスはアシュレイが屋敷にいない時、キーラのもとへやって来た。

アシュレイはニコラスがマルチナを養子に迎えいれに屋敷を訪れていることを知りながらも、何も行動を起こさなかった。

キーラもニコラスに「予定通りをお願いします。」と告げただけでいつも通りの笑顔をみせ、マルチナとニコラスを対面させた。

それが、二人の出した答えだった。

全てがキーラの計画通り動く。

そして、マルチナを養子に迎えて半年経った頃。

計画の最終段階にうつった。

まるで何事もなかったかのように振る舞っていたキーラとアシュレイ。

アシュレイはこのまま本当に何事もなかったかのように結婚生活を続けようと思っていた。

ヌバル家の養子となり、ヌバル家において淑女教育をされているマルチナの事を時々想いながらも、自分を本当に愛してくれているキーラとの結婚生活はアシュレイにとって幸せなものだったからだ。

だが、キーラだけは違った。

何事もなかったかのように振る舞っていても、それが永遠とは続かないことを知っていた。

そして、それが今日終ることも知っていた。

END

「おかえりなさい、アシュレイ様。」

「ただいま、キーラ。今日は何をして過ごしたんだい？」

いつもと変わらない会話が始まろうとしていた。

だが、今日は違った。

「今日は荷造りをしていました。といってもそこまでなかったのですが、今日は違った。」

そう、キーラは必ずこの結婚生活には終わりが訪れることを知っていたので、普段から自分の物は最低限必要なものだけしかこの屋敷に置いていなかった。

「・・・キーラ？」

玄関口である為、アシュレイだけではなく二人を囲むように立っている執事達も驚いたようにキーラを見た。

「アシュレイ様、時がきました。私は今日をもって実家に帰ろうと思います。離縁書は私のサインが必要な箇所はすでにサインをしていますので、あとはアシュレイ様だけです。終わりましたら役場に提出して下さいね。」

「奥様?!」

「キーラ様?!」

使用人達の驚愕にかられた声。

「・・・キーラつつ・・・」

そして、アシュレイの悲しみに溢れた苦しげな声。

そんな中、キーラは美しく微笑むと侍女達を見回し、そして最後にアシュレイに視線を合わせ、静かに最後の言葉を放った。

「とても幸せでした。今迄ありがとうございました。」

そして言葉なく立ち尽くしたアシュレイから静かに視線を外し、慌てて引き止める使用人達に笑顔を向けたままキーラは屋敷を出て行った。

外にはすでにヌバル家からの迎えの馬車が来ていた。

暗闇の中、月の灯りの下、音をたて消えて行く馬車。

ずっとその馬車を見送るアシュレイの顔には後悔の念がうかんでいた。

アシュレイは未だに己の愛はマルチナにあると考えていた。

そのため、ある意味これで良かったのだと自分を納得させる。

――これで、キーラも僕を忘れ・・・幸せに・・・。

いくら自分自身を無理矢理納得させようと、キーラが他の男と幸せになることを考えるだけでアシュレイは身が焦がれる想いだったが、それは今迄自分の妻だった者が取られるからだという、独占欲のようなものと、己の感情を抑えふたをした。

翌日、宰相であるニコラスがどこか呆れたような表情でアシュレイのもとを訪れた。

顔色が悪く思い悩んでいるような顔のアシュレイにニコラスはわざとらしく大きなため息をついた。

「・・・君は本当に馬鹿だね。鈍感にもほどがあるよ。キーラは何で君なんかが好きなんだろうねえ・・・。まあいい。マルチナはしっかりと教育しといたからいつでも取りにおいで。まあマルチナが了承するかは知らないけれどね。マルチナはキーラが大好きだから、キーラの我が侬をきいて又バル家に入ったけれど、このまま貴族として生きていく気はないらしいからねえ。侍女に戻るっていつてたんだけれど、それは私が止めて、何か夢はないの？なんて聞いてみた

ら、マルチナってば教師になりたいらしいんだよね。だから、もしマルチナが君を拒んだら、私はマルチナの夢を応援しようと思っ
ているんだよ。」

ぺらぺらと途切れることなく一気にアシュレイに告げたニコラスは、
用事は終わったばかりに、そのままアシュレイの返事を待つ事なく
退室しようとした。

だが、アシュレイはそれを慌ててとめ、言葉につまりながらもニコ
ラスに声をかけた。

「・・・っ・・・まってください・・・っ！キラ・・・キラはどうして
いますか？！」

そんなアシュレイの言葉にニコラスは立ち止まって、ゆっくりとア
シュレイの方へと振り向いた。

「何だい？今更キラのことが気になるのかい？もう君にはキラ
は必要のない者だろう？君が心から手に入れたかったのはマルチナ
なんだから。君が言ったんだよ。君が心から求めるモノはキラと
の結婚では手に入らないと・・・。結婚する前から君はキラを捨て
ていたんだよ。」

冷えた目でアシュレイをみながらも、笑みを浮かべニコラスはアシ
ュレイの問いをはねつけた。

顔を歪め、ニコラスから視線を外したアシュレイに、ニコラスは最

後に一言だけ告げアシュレイの執務室を去っていった。

「・・・今更遅い・・・。君はもうキーラには会えない・・・。キーラは君の前からだけではなく、この国からも消えるからね・・・。」

静かに響いたニコラスの言葉の意味をアシュレイは驚愕の思いで受け止めた。

だが、理解は出来なかった。

「・・・この国からも消える・・・？」

ぽつりと呟いたアシュレイの言葉に答えてくれる者は誰もいなかった・・・。

青く茂った緑の中、馬車は音をたて走る。

長い長い道をひたすら走る馬車。

その馬車の窓から、外をじつとながめる一人の美しい女性。

青く澄んだ瞳に涙をためながら、じつと外を見つめる。

「・・・さようなら、アシュレイ様。」

留学という理由で、バルータ国の隣、モシユベラ国へと向かうキラ。

滞在期間を設けていない留学。

またバルータ国の地を踏む日が来るのか・

キラ自身、答えを持たない”留学”が始まるのであった。

END（後書き）

やっぱり自分、王道にしたいっす！

王道っていつかこういう話は完璧100%ハッピーエンドにしたい
いいい

あー 欲求がわいてきた

うー

とりあえず完結

続きは・・・なし！と自分自身の想いにふたをしてみる

読んでくださった皆様ありがとうございました？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3864z/>

欲しいモノ・邪魔なモノ

2011年12月13日00時55分発行